

長野県神社庁報 第139号

令和6年8月1日発行：長野県神社庁 庁報発行委員会・庁報編集委員会
(長野市箱清水1-3-28 電話026-232-3355 FAX026-233-2720)



東海五県神社庁連合総会 諏訪大社 秋宮正式参拝

統理謹話

神社本庁統理 鷹司 尚武



聖上には本日四月八日、第六十三回
神宮式年遷宮の御齋行（令和十五年御
齋行）について御聴許あらせられ、い
よいよ準備が開始されますこと、御同
慶の至りに存じます。

式年遷宮は皇家第一の重事、神宮無
双の大宮と称へられ、その御創制より
御歴代の聖慮のもと、千三百年以上も
の長きに亘り厳修されてきました。

その本義と沿革に照らせば、本来は国の責任において行はれるべきであ
ると確信しますが、昭和二十年の敗戦とその後の占領政策によって、国費
による支弁の途は絶たれ、遺憾ながら第五十九回以降の御遷宮は大宮司の
責任の下に、国民の奉賛によって齋行と相成りました。

この点は、将来、必ずや是正されねばなりません、現状を耐へ忍んで
尚一層神宮の真姿顕現に努めるとともに、大御心に沿ふべく国民の真心を
結集して、今次の式年遷宮が完遂できますやう、斯界を挙げて取組んでま
りたいと存じます。

どうか神職総代をはじめ関係各位の御協力をお願い申し上げます。

目次

統理謹話 目次

日誌抄

東海五県神社庁連合総会

奉祝祭並びに祝賀会

引越し雑感

子供参宮団

特別寄稿

「薙鎌の新たな理解を旨指して」

義捐金の金額・時局研修会
神職総会

新任神職の横顔

神社本庁表彰 辞令

令和六年度歳入歳出予算書・
災害慰藉予算書

暑中見舞

伊勢の神宮「御杣始祭」



(令和五年十二月、
令和六年六月)

令和五年 十二月

一日 月次祭

六〇七日 第六十九回伊勢神宮
新穀感謝祭

十二日 教化委員会

十六日 神宮大麻頒布研修会
於 深志神社

十八日 辞令伝達式
於 白鳥神社

十九日 五県連合総会打合せ
於 諏訪市

二十一日 総代会支会長会
於 ホアルメトロポリタ／長野

二十五〇二十七日 新庁舎引越し作業

令和六年 一月

二日 月次祭

十八日 規程審議委員会
人事諮問委員会

十八日 新年初会議

二十三日 教化部合同委員会

二十六〇二十七日 東海五県神社庁
事務研修会
当番 岐阜県

二十九日 別表・特別神社宮司会

二月

一日 月次祭

六〇九日 沖縄信濃の塔慰霊祭
飯伊支部奉仕

七日 庁舎氏子会館建設委員会

九日 総代会監査会・役員会
十三日 庁舎氏子会館
建設特別委員会
理事会

十三日 理事會

十五日 青対委員会

十六日 祈年祭

十九日 庁舎氏子会館
建設特別委員会

十九日 神政連原本部時局講演会
二十一 五県連合総会打合せ
於 諏訪市

二十二日 神政連原本部役員会
二十七〇二十八日 東海五県神社庁
教化神政連合同会議
於 岐阜県

二十七〇二十八日 浦安の舞研修会
於 深志神社

二十九日 神宮大麻暦頒布終了奉告祭
二十九日 旧庁舎解体清祓
二十九日 教化委員会
於 深志神社

三月

一日 月次祭

一日 旧庁舎解体工事開始
五日 神宮大麻暦頒布終了祭
於 神宮

五日 青対委員会

五〇十日 神政連原本部海外研修旅行
於 ベトナム社会主義共和国
十三日 神社庁長会 於 本庁

十八日 総代会定例代議員会
十八日 人事諮問委員会
十八日 百四回神社庁定例協議員会

二十一〇二十二日

第二十六回子供参宮団

二十六日 神政連原本部代議員会

二十七日 事務担当者会

二十七日 神職総会

二十八日 庁舎氏子会館建設委員会
二十九日 調査委員会
於 深志神社

四月

一日 月次祭

一日 辞令伝達式
新庁舎氏子会館
竣工奉祝祭並びに祝賀会

四日 竣工奉祝祭並びに祝賀会
十日 総代会役員会
十二日 五県連合総会打合せ
於 諏訪市

十五日 理事会

十六日 庁報編集委員会

二十四日 青対委員会

二十五日 旧庁舎解体工事終了
二十六日 五県連合総会打合せ
於 諏訪市

五月

一日 月次祭

九日 東海五県神社庁評議員会
於 諏訪市 ホアルメツの湯
十日 第七十九回連合大会
於 岡谷市文化会館

十日 東海五県神社庁連合総会
於 岡谷市文化会館

十四日 庁報編集委員会
二十一日 全国神社総代会代議員会
於 本庁

二十二日 神社本庁表彰式
於 明治記念館

二十二日 青対委員会

二十三〇二十四日 神社本庁定例評議員会
於 本庁

二十四日 班斂式

二十七日 藤井茂信神社庁顧問葬儀
於 ホテル犀北館

六月

三日 月次祭

六〇七日 神宮評議員会
於 神宮

十日 県下神職球技大会
於 埴科郡坂城町

十日 神政連本部長会・
事務局長連絡会
於 本庁

十日 神政連国会議員懇談会
十一 総会・合同懇談会
神政連中央委員会
於 本庁

十一〇十二日

神社庁事務担当者会
於 本庁

十三日 辞令伝達式
十三日 教化部役員会
十七〇二十一日 東海地区中堅神職研修会
於 神社庁

十九日 庁報編集委員会
二十六日 中信地区連絡協議会
二十八日 教化部合同委員会

東海五県神社庁連合総会 開催

令和六年五月十日、東海五県連合総会が開催されました。

まずは神社本庁統理 鷹司尚武様、神宮大宮司 久邇朝尊様以下、評議員が諏訪大社（北島和孝宮司）下社秋宮において正式参拝をしました。（表紙写真参照）その後、午前中に第七十九回長野県神社庁・長野県神社総代会連合大会が開催された岡谷市文化会館（カノラホール）に移動して、同会場で総会を行いました。

清興として午後十二時三十分より東海五県から訪



御諏訪太鼓

れた神社関係者千百名を、大小さまざまな太鼓が組太鼓で演奏される「御諏訪太鼓」の迫力ある演奏がお迎えしました。

午後一時より、長野県出身でテレビ出演から全国に知られ、近年では保守的な言論で注目される弁護士北村晴男先生の「日本の行く末と神社界について」という講演をしました。

午後二時より総会が始まりました。各行事の後、当番県の滝和人長野県神社庁長が挨拶をしました。続いて神社本庁統理 鷹司尚武様より告辞、神宮大宮司 久邇朝尊様より、来賓の祝辞を頂戴しました。

次いで、当番県の滝和人庁長が議長となり議事になりました。前年度当番県の



北村晴男先生

岐阜県より経過報告がありました。各県提出の議案協議、続いて宣言決議が可決されることになりました。次年度当番県の三重県の塚原徳生庁長より挨拶をいただきました。

最後に、長野県神社総代会 藤村吉彦会長の発声により万歳三唱を行って、午後三時三十分全日程を終了しました。



長野県神社庁長挨拶

連合総会

日時 令和六年五月十日

会場 岡谷市文化会館(カノラホール)

御来賓 神社本庁統理

神宮大宮司

参加者

三重県 六四名

愛知県 三二五名

静岡県 一三五名

岐阜県 一九二名

長野県 五四五名

総計 一、二五一名



聖寿万歳

東海五県神社庁連合総会提出議案

宣 言

一、憲法改正に向け万全の対策を講ずるとともに、自主憲法のあるべき姿を明確に示し、関係方面に強く働き掛けるやう、神社本庁に要望するの件

二、靖國神社公式参拝を柱とした英霊顕彰の心を護持顕現するため、日本人の死生観や慰霊に関する文化を内外に啓発する運動を展開するやう、神社本庁に要望するの件 (以上五県共同提案)

三、天皇陛下よりの御聴許を拝し、第六十三回神宮式年遷宮の御樋代木奉迎送を含む諸儀が滞りなく取り進められるよう尽力するとともに、国民総奉賛へ向けて一層幅広い活動を展開するための諸施策を推進せられるやう、神社本庁に要望するの件

(三重県・愛知県・静岡県・長野県共同提案)

四、氏子意識を基本とする共同体意識の涵養とともに神社の公共性を顕現し、地域共同体との連携を深め、神社と地域の活性化に努めるやう申し合はせるの件

(岐阜県提案)

本年四月八日、九年後の令和十五年に予定されてゐる第六十三回神宮式年遷宮の準備を進めることについて、御聴許を正式に戴いたことが宮内庁長官を通して神宮大宮司に伝へられた。

これにより先例によれば、来年春には御用材を伐り出す御杣山を御治定され、遷宮にあたり最初の祭儀である山口祭、木本祭が斎行されることとなる。

このやうに本宗と仰ぐ神宮の、二十年に一度の式年遷宮の始まりである「遷宮元年」となる重要な時期に当り、我々神社関係者は「神宮の真姿顕現」に向けて決意を新たにすると共に、神社本庁設立の原点とあるべき将来を見据え、神社本庁憲章に則り統理を中心として斯界が大同団結し、皇室・国家・社会に対して果たすべき使命に邁進することを改めて期し、そして我等東海五県神社関係者は、一致団結、総力を結集し、率先して神宮式年遷宮奉賛の赤誠を捧げて盡力することを誓ふ。

右、宣言する。

令和六年五月十日

東海五県神社庁連合総会

庁舎・氏子会館竣功 奉祝祭及び祝賀会

御挨拶

令和御大典特別事業として取り進めておりました長野県神社庁庁舎氏子会館建設事業は、平成二十八年の発議より約九年の年月を経て晴れて本日、最後の祭儀となります。竣功奉祝祭を皆様と共に迎えられたことは偏に関係各位の御理解と御協力によるものであり、心より感謝を申し上げます。

顧みますと本建設事業に伴う諸祭儀も令和四年九月十二日地鎮祭、令和五年三月七日上棟祭、五月十八日仮殿遷座祭、十月十二日の本殿遷座祭並びに遷座奉告祭を経て、本年令和六年二月二十九日の旧庁舎解体清祓をもちまして本日を迎えます。

この度の建設事業に伴う諸祭儀は県内神社での祭祀の師表となる容儀を以て肅行すべしとの指針に基づき、全ての祭儀は神社庁祭式講師や助教の先生方と共に細部に至るまで協議検討しながら進めて参りました。

それぞれの祭儀は、建設工事の安全無事を祈る事が第一の目的ですが、それと共に肅行に向け様々な意見を出し合いながら協議検討し、一つの目標に向かう過程も大切な事であると考え、議論を重ねて参りました。

この度の建設事業は非常な困難の中でありましたが、日頃はそれぞれの立場や想いで神明に奉仕する我々も、一旦緩急あれば向かうところを明らかにして強く団結すれば、今日の素晴らしい庁舎氏子会館が建設出来たという事実こそが、此の先の困難な時代に対峙してゆかねばならない次世代の神社関係者への大きな励みになるのではないかと存じます。

歴代の先人達が磨き上げ我々に託された明き清きまことの心は、必ずこれを継承し次世代に引き継いで行かねばなりません。

願わくば本日の祭典では、この度の建設事業に対しお力を頂戴しました貴職を始めとする県内神職、総代、氏子崇敬者の皆様への感謝と共に、次世代の神社関係への御加護を御祈念頂ければ幸甚に存じます。

結びにあたり県内神社の御隆昌と皆様方の御健勝を衷心より御祈念申し上げ、御礼の御挨拶と致します。

令和六年四月四日

長野県神社庁長 滝和人
庁舎並氏子会館建設委員長

祭典次第

時刻肅主以下祭員参進し祭場所定の座に著く

次に修祓

次に肅主一拝

次に献饌

次に祝詞奏上

次に肅主玉串拝礼

次に神社庁長玉串拝礼

次に神社総代会長玉串拝礼

次に参列者玉串拝礼

次に撤饌

次に肅主一拝

奉仕者

所 役	氏 名	(役職 ・ 奉務神社)
肅 主	宮 坂 信 廣	(神社庁副庁長・四柱神社宮司)
副肅主	山 崎 洋 文	(神社庁理事・白山神社宮司)
祭 員	松 村 健 悟	(神社庁理事・若宮諏訪神社宮司)
典 儀	齋 藤 安 彦	(神社庁理事・湯福神社宮司)
伶 人	長 野 雅 楽 会	

笙 若槻徹也・箏 築前田美保・龍笛 齋藤英之

令和六年四月四日

新庁舎氏子会館

竣功奉祝祭出席者

神社本庁統理

鷹司 尚武

神宮少宮司

齊藤 郁雄

三重県神社庁長

塚原 徳生

愛知県神社庁長

千秋 季頼

静岡県神社庁長

河村 基夫

株式会社中村建築研究所

高橋 賢二

北野建設株式会社

北野 貴裕

株式会社アスピア

石川 和秀

株式会社共立解体

柳澤 健史

日本会議長野会長

加藤 久雄

箱清水区長

寺島 頼利

旧庁舎土地寄贈者

塩沢 均

青森県神社庁長

工藤 均

島根県神社庁長

角河 和幸

秋田県神社庁長

面山 浩康

熊野那智大社宮司

男成 洋三

特別協賛者

神山 英夫

南佐久

渡邊 克彦

松塩筑

永持はな子

上水内

水野 邦樹

長野

齋藤 紳悟

南佐久

井出 行則

松塩筑

宇治橋 淳

上水内

宮下 俊樹

長野

櫻井 龍一

北佐久

曾根 徳隆

松塩筑

遠藤 久芳

上水内

富岡 晋一

総代会

笠原 透

北佐久

武者 幸彦

松塩筑

大澤 節子

上水内

越志 秀徳

総代会

高橋 登

北佐久

水澤 貴文

松塩筑

山崎 洋文

上水内

武井 芳久

総代会

工藤 勇

上小

清住 宗廣

松塩筑

上條 哲哉

上水内

極意 憲雄

総代会

五味幸太郎

上小

青木 立生

松塩筑

小穴 真希

上水内

諏訪 雅彦

総代会

藤森 芳樹

上小

石和 大

南安曇

保尊 勉

上水内

近藤 保三

総代会

御子柴仁史

上小

甲田 圭吾

南安曇

小平 弘起

飯水

石川 彰

総代会

大久保賢一

諏訪

宮坂 清

南安曇

山崎 佳宏

飯水

鷺尾 隆男

総代会

小松 俊夫

諏訪

名取 人利

南安曇

山田 充春

飯水

高橋 穰

総代会

藤村 吉彦

上伊那

白鳥 俊明

南安曇

飯田 泰之

長野

太田 秀系

総代会

松澤 求

上伊那

松村 健悟

大北

竹内 直彦

長野

瀧澤けい子

総代会

山本 勝洋

上伊那

立澤 俊輔

大北

傘木 則興

長野

齋藤 安彦

総代会

高村 征弘

飯伊

遠山 景一

更級

堀内 潔人

長野

丸山 肇

総代会

保木野幸雄

木曾

滝 和人

更級

宮澤 和彦

長野

齋藤 英之

総代会

児玉吉郎治

木曾

下原 伸一

更級

五明 貴寿

長野

矢澤 是

総代会

小林 洋之

木曾

徳原ちずる

更埴

片岡 一仁

長野

齋藤 吉睦

総代会

伊倉 順治

松塩筑

奥谷 一文

上高井

勝山 忠厚

長野

太田 秀史

総代会

齋藤 吉睦

松塩筑

宮坂 信廣

上高井

勝山ひろみ

長野

瀧澤 理恵

総代会

齋藤 吉睦

松塩筑

牟禮 仁

上高井

山岸 孝爾

長野

若槻 徹也

総代会

齋藤 吉睦

松塩筑

大澤 明三

下高井

傳田 幹彦

長野

水野 亮

総代会

齋藤 吉睦

奉祝祭及び祝賀会の様子



引越し雑感

山崎 洋文



昨年令和五年九月二十九日に新神社庁・氏子会館が完成し、引き渡されました。その後十月十二日神殿遷座がおこなわれました。そして、本年四月四日に竣功奉告祭が行われるまでの半年間、旧庁舎から新庁舎への引越し作業が였습니다。

昭和三十三年から続いた旧庁舎には、長年にわたって蓄積された膨大な



取り壊し清拭

資料が保管されてきました。これらの資料は、長野県神社庁の歴史や活動、そして地域の文化や伝統を記録したもの、また、他県の神社庁誌、神社関係者の手記など貴重なものでした。

旧庁舎に保管されていた資料は、古文書、報告書、神社規則、写真など多岐にわたります。これらを一つ一つ確認し分類し、整理する作業は時間と手間がかかるものです。

大量の資料を新庁舎に運ぶために、重量のある資料や大きな機材は専門業者にお願いましたが、廊下・ロビーが段ボール箱でいっぱいになりました。

竣功奉告祭の一週間前になっても片付けが終わりません。各支部の事務局の会議のあと、事務局員の皆様にお願ひして資料を一階から二階の倉庫に運びあげてもらいました。

四月に入ってから、分類等が終わらず、二日間の突貫作業で、本棚の整理を行いました。この作業は理事一人と松塩筑の事務局員が行ったもので、大変貴重な労働奉仕でした。



旧庁舎取り壊し

この引越しの機会に古い資料をデジタル化することが、決められたスペースに大量の資料を整理保管する最善の方法であり、この大量の資料を活用できるようにすることが、これからの大きな課題です。これを成し遂げることができた時が、本当の引越しの終了となることでしょう。

悠久の時の流れに触れる

第二十六回子供参宮団

青少年対策推進委員会 副委員長

小平 和彦

第二十六回子供参宮団が三月二十一日(二十二日)の日程にて開催されました。昨年四年ぶりに参宮団を再開しましたが、感染対策や人数縮小など制限を設けた中での実施となりました。今回は新型コロナウイルス第五類への移行に伴い、従来通りに戻し募集したところ、県内各地より神職スタッフ含め



神宮職員の説明

百二十四名の大勢の参加者を得て開催することができました。

近年の物価高、円安の影響によりバス代の高騰等様々な経費がかさむ中で参加者の負担をなるべく減らせるよう委員会では協議を重ねてまいりました。バスガイドを無くし、ガイド役を委員で賄い他にもスタッフで出来ることは委員で行うことにより経費の削減を図りました。

旅行当日は前日からの寒波の影響で北信は大雪となり、早朝から集合場所の雪かきを余儀なくされる委員もいましたが、バス三台概ね時間通り無事に出発致しました。バスの車内ではガイド役の委員が行程説明や人員点呼を行い、途中休憩時には交通誘導等安全確認を怠らぬよう細心の注意を払いました。バス毎に参加者全員から『好きな

こと、今頑張っていること、今回の旅行で楽しみにしている事』など自己紹介をして頂き交流を深める良い機会となりました。車内では趣向を凝らし紙芝居やクイズ形式、神話のアニメのDVD上映など子供達にも親しみやすい方法で神宮の説明や手水、参拝作法などの学習を行いました。

内宮到着後は宇治橋前でバス毎に写真を撮り、神宮神職の日江井さんの案



宇治橋前

内のもと正式参拝と御垣内参拝を致しました。その間にスタッフの一部は神宮会館へ行き全員の荷物を下ろし大講堂に運び込む作業を行った後本隊へ合流しました。正式参拝では慣れない正座に「足痛え」と嘆く子もいましたが、御垣内参拝を終えた後は皆清々しい面持ちであったのが印象的でした。春休み中で参拝者も多くおはらい町やおかげ横丁の散策時間が少し短くなってしまうましたが、各々散策を楽しんでいました。ここでも委員を適宜配置し、宿泊場所の神宮会館まで誘導を行い安全に努めました。

神宮会館では夕食時に食前食後感謝



神宮会館

の歌を唱え、子供達は食物への感謝の気持ちを込めながらなるべく残さないよう食べてくれていました。夕食後大講堂にて神宮神職の小川先生の講話を聞き、作文を書いてもらい一日目を終えました。

翌日は天候に恵まれ、昨年出来なかった内宮早朝参拝を行いました。子供達は皆元気で出発し、委員の先導のもと適宜説明を加え参拝し、朝の静かで厳かな神宮の雰囲気味わっていました。お世話になった神宮会館の職員さんに御礼を済ませた後に外宮を参拝、ここでも委員が先導し正宮や古殿地、多賀宮等別宮の説明も行いました。外宮参拝後は昨年悪天候で行けなかったナガシマスパーランドを遊園し、皆無事に二日間の日程を終えることが出来ました。

今回の旅行はバスガイドが不在の中で、旅行が安全に円滑に進められるよう委員会で検討し、不慣れな所もありましたが、委員それぞれ協力し合い参加者全員事故なく無事に終えられたこ

とに安堵しております。委員も各々知識の向上に努め、帰路では子供達だけでなく親も『知らないこといっぱい教えてもらってよかったね』と話しているのを聞き非常に嬉しく感じました。青対委員会では昨年靖國神社、神宮参拝旅行のホームページを作り広報と募集活動を行っております。今後この意義深い活動がより良くなりますよう努力してまいりますので皆様方の御協力をお願い致します。



内宮前

「特別寄稿」

薙鎌の新たな理解を目指して 3

長野県立歴史館 特別館長 笹本 正治

長野県立歴史館、特別館長笹本正治先生による特別寄稿文の第3回です。

前号では、長野県内の各地に伝わる薙鎌を調査して、その大きさは様々で、多様な形態を「蛇」「トカゲ」「タツノオトシゴ」「鳥」「その他」の胎児、芋虫、のように分類しました。そして文献や発掘品から、それぞれの薙ぎ鎌には異なる目的を持つ可能性があり、その歴史には様々な要素を含んでいることを示しました。本号では、いよいよ薙鎌と諏訪信仰の関係に論考を進めていきます。

4. 諏訪大明神と女神

薙鎌といえは諏訪大社なので、諏訪

大社の祭神について触れておきましょう。

『諏訪大明神画詞』^{すわだいましょうじんえことば}には元寇時^{げんこう}に大明神が龍の姿となつて西に向かい、元軍を滅ぼしたとあります。『太平記』は文永二年(一二六五)八月十三日に元が七万余艘の兵船で博多の津に押し寄せた時、神風が吹いて元軍は壊滅したといひます。諏訪の神は「諏訪の湖の上より、五色の雲西に聳^{そび}き、大蛇の形に見へたり」と、大蛇の姿とされました。室町時代に作られた『すわの本^{ほん}地』などによると、諏訪大明神は竜、あるいは蛇の姿をしています。中世の人々にとって諏訪大明神は水を司り、神風^{かみかぜ}を起こす竜、大蛇の姿と信じられていたのです。

佐久市にある新海三社神社^{しんかいさんしやじんじや}の中本社



新海三社神社御神体の鎌

(祭神は建御名方^{たけみなかたのみこと}命)と西本社(祭神は建御名方^{たけみなかたのみこと}命の兄の事代主^{ことしろぬしのみこと}命、誉田別^{ほんだわけのみこと}命)の間にある石幢形^{せきどうがた}の石造物は御魂^{みたま}代石^{しろいし}と呼ばれ、幢身^{とうしん}に動物が彫られ、延文三年(一三五八)戊三月十二日の刻記があります。御魂代^{みたましろ}というのは神霊の代わりとして祀るもの、御神体のことですから、御魂代石は神の依代^{よりしろ}、御神体と考えられます。伝説ではこの石の耳を当てると諏訪湖の波音が聞こえるといひます。ですから、幢身に彫られたのは諏訪大明神の姿でしょうが、薙鎌のタツノオトシゴやトカゲの形にそっくりです。

鳥形の薙鎌の出発点はどこにあるのでしょうか。着目すべきは新海三社神

社の御射山祭です。御射山祭は新海神社の東約一・七キロメートルのところにある御射山社で行われます。令和四年十月二日の御射山祭は午前九時三十分頃、神職が西本殿（祭神は建御名方命と八坂刀売命の間に生まれた佐久開発神の興波岐命）にお参りし、中本社から御射山祭の御神体を迎え、宮司及び神職二人が東本社へ進みました。十時に宮司と神職二人、関係者一三人が東本社前に整列し、宮司がお祓いをしました。その後、宮司が東本社に入り、行列の櫛（檜に幣）や薙鎌などの威儀物が手渡され、宮司が御神体（十二単を着た四〇センチから五〇センチある三枚の薙鎌）を抱いて出御しました。行列には薙鎌を持った二人、大きな鎌と熊手の二人もあり、宮司が御神体を抱いています。磐座（御休石）では御幣の上に御神体を安置し、拝礼しました。その後、再び行列を組んで御射山社に向かい、御射山社の石祠前に着くと、祠脇に櫛や幣帛、薙鎌が並べられ、神饌を供え、御神体が祠の上に置

かれました。祝詞を唱えて神事を行い、お神酒をいただいて、行列を組んで神社へ戻り、東本社に御神体が戻されました。御神体は三枚の薙鎌を重ねて、十二単を着せています。十二単を着るので御神体は女性が想起されているのでしよう。祭では御射山社の男神の建御名方命に女神が会いに行くことになります。

一般的に諏訪湖の御神渡は上社の建御名方命が下社の八坂刀売命のもとへ



御射山社の石祠に安置された御神体

通った道筋だといわれます。顕昭が著した鎌倉時代の歌学書『袖中抄』の巻八「宇治の橋姫」には、「信濃の（諏訪）すハの明神の一宮と申女神のもとへ、（師走）しハすの晦夜かよひ給ちかい」とあります。諏訪の御神渡りは諏訪大明神が女神の元へ行くと解されていたので、諏訪円忠が著した「諏方大明神画詞」では佐久の新開社（新海神社）と諏訪郡内小坂の鎮守（小坂鎮守神社、岡谷市湊）の二神が諏訪大明神と湖中に御参会するとしています。「諏訪神社縁起上下巻」では、佐久の新海と小坂の大明神の二神は御神渡の時必ず原始となり、新海大明神は諏訪大明神の乳母で、小坂の鎮守と二神だとあります。ここからも、新海大明神は本来女性であった可能性があります。

応永四年（一三九七）十一月二十四日に神長が幕府へ御神渡りを注進した文書に、「佐久新海明神は桑原浜より、昌溝渡へ下りまして、御参会湖中に候」とあるように、御神渡注進状にはしばしば佐久新海明神が出てきます。従来

の一般的な御神渡りの説明を前提にするならば、諏訪大明神と会う佐久新海明神は女神だと解釈されていたのでしよう。

5 竜と鳳凰

中国では三皇（庖犧〔伏羲〕・女媧・神農〔黄帝〕）の後、堯が出現したといえます。天地創造神である庖犧と女媧は蛇身で、規矩を持ちます。蛇身であることは水との関わりを示しているのではないのでしょうか。黄帝は五穀の栽培を奨励し、野獣を飼いならせました。舜の課題は大洪水対応でしたが、それを成功させたのは禹でした。このように中国における理想の皇帝は、民の生活を安定させる義務があり、その大きな要素に治水がありました。換言するならば、自然に対抗し人間の生活を保障する力を持つ者が伝説の皇帝なのです。

国を統治する者に期待された治水の役割は日本においても同じでした。『古事記』によれば、須佐之男命は櫛名田



新海三社神社の御霊代石

比売を救うために、ヤマタノオロチを退治し、十拳剣で尾を切ると中から大刀が出てきたので、それを天照大御神に献上しました。これが「草那藝之大刀」（天叢雲剣）だとされます。須佐之男が退治したヤマタノオロチは大蛇であり、水の化身、洪水の源だといわれます。八つにも分流して大きな水害を起こす川を制することができたのが、聖なる特別な力を持つ須佐之男だったのです。

仁徳天皇は難波の堀江を開鑿し、茨田の堤防を築き、河内平野の水害を防ぎ、開発を行ったといえます。仁も徳もある理想の天皇は治水をし、田地を開拓し、農業を振興させる、自然に働

きかけうる能力を持つとされたのです。

『常陸国風土記』によれば、箭括の麻多智が夜刀の神（蛇）を打ち殺し、追ひ払って開墾した。孝徳天皇の治世（五九六～六五四年）、壬生連磨がその谷を占有し、池の堤を築かせると、夜刀の神が集まったので、「帝のご意向に従わないのか」というと、蛇たちは姿を消したといえます。谷で水を司る神たちの上に、天皇がおり、堤防を造るのはその役割の一つだったのでしょう。

日本でも、聖なる人（その代表的な人物として弘法大師）や特別な力を持つ天皇が治水をすることができると考えられていたのです。

人々が信仰する神についても、水を



諏訪大社上社本宮の水信仰のシンボル天流水舎



雨降宮嶺方諏訪社の薙鎌

制し、自然の力に対抗できる力が期待されました。その代表が諏訪大明神で、その姿は水に関係して竜、もしくは大蛇だとされました。竜について白川静は、洪水神とされ、竜形が水神の普遍的な形体で、古代のシャーマニズム的な信仰に起源しているといえます。水を司る水神は竜の姿をしているということになります。

新海三社神社の中本社と西本社の間

にある、延文三年（一三五八）の刻記がある石幢形の石造物を御魂代石と呼んでいます。この石の耳を当てると諏訪湖の波音が聞こえると伝えられています。御霊代石の位置と彫られている姿からして、ここでも竜が諏訪大明神のシンボルだったことが示されています。

御魂代石に彫られている竜は、古い薙鎌の形にそっくりです。薙鎌の形の源流の一つが水を制する竜の姿にあることは間違いありません。ところが、新海三社神社の御射山祭に登場する御神体の薙鎌、あるいは行列の威儀具としての薙鎌は、御魂代石に彫られた竜の形態とは異なり、鳥に近い姿です。

新海三社神社の中心をなす祭神は、東本社に祀られた建御名方命と八坂刀売命の間に生まれた興波岐命で、佐久の開発神だと理解されてきた男神です。けれども、新海三社神社の御射山祭で宮司が抱いていた御神体は、長さ四〇センチから五〇センチの三枚の薙鎌でした。薄いピンクの十二単を着せ

ていますから、この神は女神と意識されていたものでしょう。

「諏訪神社縁起上下巻」は、新海大明神を諏訪大明神の御乳母だといいます。乳母は女性です。御射山社に祀られている建御名方神が男神だとすると、東本社に祀られている興波岐神が女性の格好をして会いに行くとは考えがたく、御神渡りの一般的説明である男神が女神に会いに行くということからすると、新海大明神は建御名方命が会うべき女神だと推察されます。

いずれにしろ、薙鎌は諏訪信仰の根源を示す神器だといえるでしょう。

（次号、寄稿文は最終回となります。）



諏訪大社上社前宮の水眼（水源）

令和六年能登半島地震義捐金

令和六年六月二〇日現在

支 部 名	納入金額(円)
南 佐 久	二六四、〇〇〇
北 佐 久	二五五、〇〇〇
上 小	七四三、〇〇〇
諏 訪	五〇〇、〇〇〇
上 伊 那	九八三、〇二六
飯 伊	七三〇、〇〇〇
木 曾	三五一、〇〇〇
松 塩 筑	一、七二七、〇〇〇
南 安 曇	六九三、九一九
大 北	四七八、四二四
更 級	四七〇、二六〇
更 埴	一三八、〇〇〇
上 高 井	二三七、〇〇〇
下 高 井	一五二、〇〇〇
上 水 内	六〇六、一五〇
飯 水	二四二、〇〇〇
長 野	六九一、八二五
神 社 庁	四八、〇〇〇
計	九、三二〇、六〇四

時局研修会

令和六年二月十九日に神道政治連盟長野県本部（宮坂信廣本部長）主催により長野県神社庁に於いて時局研修会が開催された。

講師には、軍事漫談家とも称される、ジャーナリスト井上和彦先生をお迎えして「あ、そうだったのか 憲法改正の裏にあるもの」と題し講演を行った。当日は、神職総代合わせて四十三名が参加され、一同講演に聴き入っていた。



神職総会

令和六年三月二十七日事務担当者在会議に引き続き午後三時より神職総会が新築された長野県神社庁に於いて行われました。作家の増田晶文先生に「日本の文と日本の酒」という御講演を戴きました。

神職六十三名が参加しました。



新しく任命された神職を紹介します

新任神職の横顔



猿田 隆道 さるた たかみち
飯玉神社 三十一歳
北佐久支部

この度、飯玉神社欄宜を拝命致し、身の引き締まる思いです。代々引き継

がれる神職の家に生まれた事の大きな責任を持ち、親の教えである人との心のふれあいを常に意識し大事として、今後の神明奉仕に勤め励む所存です。

今はまだ神職となり日が浅いですが、年月を重ねていつの日か、地域受け持ち神社の皆様方から誉言を貰えるように修練を重ねてまいります。どうぞ皆様方の御指導のほど、よろしくお願い致します。



しちの まさかず
七野 真一
諏訪大社 四十五歳
諏訪支部

この度令和五年九月一日付を以て、諏訪大社権禰宜を拝命致しました。

社家ではない私が有難い御縁を頂き、一度離れた神職の道を再び歩む機会を頂き大変感謝をしております。

人生二回目の出仕を経験しましたが恥ずかしながら未だ半人前と心得てい

ます。今後は、己の足りない点を磨きつつ神職として人とした納得のいく人生を送りたいと考えております。どうぞ御指導御鞭撻の程、宜しく願います。



すぎはら たくろう
杉原 拓朗
諏訪大社 二十六歳
諏訪支部

この度令和五年九月一日付を以て、諏訪大社権禰宜を拝命致しました。

三年半の出仕の期間を経て未だ至らぬ点が多くありますが責任ある権禰宜の職を任じられたことに感謝をしつつより強い責任感を持ち、日々の奉仕に努めていく所存です。

また神職としての自覚を改めて強く抱き、日々の生活においても己を客観的に見て律していきたいと考えております。

どうぞ御指導御鞭撻の程、宜しく願います。

第4回 長野県神社御朱印展

期間 令和6年

11月5日(火)～10日(日)

会場 長野県神社庁(長野市)

主催 教化部 調査委員会

内容 県下一〇社の御朱印を一堂に。今回は、参加神社の特別御朱印、御朱印帳も展示いたします。

入場無料。

第3回 長野県神社御朱印展

来場者アンケート集計報告

令和5年に開催した御朱印展(11月7～12日・佐久市)において、来場者を対象にアンケートを行いました。本展の感想、御朱印に対する一般の方の捉え方などを掲載しております。

下のQRコードを読み込み、神社庁ホームページより詳細をご覧ください。



寄附者顕彰

令和五年十二月

神社本庁統理感謝状

三十万円以上寄附

支部名	神社名	鎮座地	氏名
大北	諏訪神社	小谷村	株式会社鷺澤建設 代表取締役 鷺澤 尊
上小	横尾神社	上田市	洪澤弘子

長野県神社庁長感謝状

三十万円以上寄附

支部名	神社名	鎮座地	氏名
下高井	日和山神社	中野市	北村忠彦
更級	布制神社	長野市	高澤通泰
大北	諏訪神社	白馬村	株岩岳リゾート
更埴	會地早雄神社	坂城町	小山克己
松塩筑	八坂神社	松本市	出井東亜雄



令和五年十二月

昇級・神職身分一級		戸隠神社	
宮司		水野邦樹	
三・一		上水内	
昇級・神職身分二級上		宇賀神社	
宮司		宮川滋彦	
三・一〇		上水内	
昇級・神職身分二級		大飼神社	
宮司		石川 彰	
三・一〇		飯水	
諏訪大社		諏訪神社	
権祢宜		北爪 聖	
四・一		諏訪	
諏訪社		御嶽神社	
権祢宜		下原伸一	
四・一		木曾	
四柱神社		宇佐八幡宮	
権祢宜		丸山忠孝	
四・一		大北	
墨坂神社		宇賀神社	
宮司		山岸孝爾	
四・一		上高井	
宇賀神社		権祢宜	
極意靖世		四・一	
上水内		上水内	

任命

諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
桑井神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
藤澤秋神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
離山神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
大宮神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
源関神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
縣神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
根際神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
平井神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
御嶽神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
伴野神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
安土倍神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
三子束神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
櫻井神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪八幡神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
八幡神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
蓬田神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
春日社諏訪社合殿	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
熊野神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
新海神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
諏訪神社	兼 宮司	武藤弘樹	一・二	長野

諏訪社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
根神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
諏訪神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
西浦神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
村松神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
阿島川神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
夫神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
奈良本神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
戀渡神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
宮測神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
水澤神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
室賀水上神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
馬倉神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
越戸神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
諏訪神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
愛宕神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
出浦瀧神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
祢津日吉神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
山神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
大門神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
稻荷神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
八幡社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
龍藏社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
諏訪社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
火産靈社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
大宮諏訪神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
和田神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
天神社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
稻荷社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
神明社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久
八幡社	兼 宮司	畠山祐成	三・一	北佐久

比岳宮佐神社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
秋葉社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
諏訪社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
大宮八幡宮	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
諏訪社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
東照宮	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
大門神社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
東明神社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
浅間社	兼宮司	塩川秀和	三一	松壇筑
若宮八幡社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
諏訪社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
御嶽社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
神明社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
神明社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
立岩神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
田神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
皇大神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
飯綱者	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
八幡社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
古町豊受大神宮	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
愛宕社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
山神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
田神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
松尾神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
長津瀬神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
諏訪神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
神明社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
駒形神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
秋葉金山社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
杜宮司神社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小
新海熊野社	兼宮司	立岩千尋	三一	上小

諏訪社	兼宮司	塩川秀和	三・一	松塩坑
三嶋山神社	兼宮司	塩川秀和	三・一	松塩坑
長野縣護國神社	本 祢宜	奥谷公胤	四・一	松塩坑
豊國神社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
諏訪社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
諏訪社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
諏訪社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
伊勢社	兼宮司	望月俊仁	四・一	下高井
津島神社	兼宮司	渡部長治	四・〇	諏訪
八幡神社	兼宮司	武者幸彦	五・一	北佐久
柵口神社	兼 祢宜	猿田隆道	五・一	北佐久
十五社神社	兼宮司	松倉克幸	五・一	諏訪
子之社	兼宮司	西濱多恵子	五・一	諏訪
五宮神宮	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
東山神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
和智磐神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
諏訪神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
諏訪神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
八劍神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
白山神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
木曾能野神社	兼高代務者	高橋 守	六・一	木曾
嚴島社	兼宮司	保尊 勉	七・一	南安曇
諏訪社	兼宮司	富岡清彦	七・一	上伊那
昇任				
熊野出速雄神社	本 宮司	武藤弘樹	一・二	長野
阿禮神社	本 宮司	塩川秀和	三・一	松塩坑
諏訪大社	本 権宮司	村上益弘	四・一	諏訪
諏訪大社	本 祢宜	桃井義弘	四・一	諏訪
諏訪護國神社	本 宮司	渡部長治	四・一	諏訪
穂高神社	本 宮司	保尊 勉	七・一	南安曇

新任	飯玉神社	祢宜	猿田隆造	五・一	北佐久
転入					
本務替	體美社 境章 三本程子 愛	權祢宜	小嶋 遼	四・一	北佐久
辭職	倉井神社 (武水別神社より) 長野縣國神社 藪原神社より 津島神社 諏訪神社・他4社 八幡神社 十五社神社 武水別神社	祢宜 祢宜 兼 宮司 兼 宮司 兼 宮司 兼 宮司 兼 宮司 兼 祢宜	武井祥憲 奥谷公胤 立岩尊夫 村上益弘 横越則久 望井嚴穂 金井重忠 森越義建	六・一 四・一 二・九 三・二 三・二 三・二 四・〇 四・三・〇	上水内 松塩筑 上小 諏訪 諏訪 北佐久 更級
退職	諏訪大社 穂高神社 豊國神社 埴幽 謹んで御霊の安らかなることをお祈りいたします	權宮司 宮司 宮司 宮司	原 弘昌 穂高光雄 望井嚴穂	三・三・一 三・三・一 三・三・一	諏訪 南安曇 下高井
本務替	奉務神社 職名	階位・身分	氏 名	埴幽日	支部名
	阿禮神社宮司	正階・二級上	塩川秀實	一一・二・九	松塩筑
	諏訪護國神社宮司	正階・二級	久保田正彦	二・一一	諏訪
	五宮神社宮司	正階・二級上	高橋邦衛	三・二・九	木曾
	武水別神社名譽宮司		松田孝弘	四五	更級
	戸隠神社名譽宮司		藤井茂信	四・二・五	上水内

令和6年度長野県神社庁歳入歳出予算書

歳入の部

(単位：円)

款	科 目	予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	幣 帛 幣 饌 料	699,000	740,000	△41,000	神社本庁より
2	交 付 金	110,860,000	113,618,000	△2,758,000	本庁交付金
3	負 担 金	33,870,000	34,165,000	△295,000	支部負担金、特別負担金、神職負担金
4	協 賛 金	5,900,000	3,762,000	2,138,000	特別寄贈金、特別協賛金
5	財 産 収 入	500,000	500,000	0	財産利子配当金
6	補 助 金	120,000	120,000	0	神社本庁より参事給与補助金
7	各 種 証 明 料	2,920,000	2,920,000	0	神職任命・登録料、承認料、各種手数料・証明料、階位授与交付金
8	諸 収 入	2,500,000	2,500,000	0	賽物収入、雑収入
9	管 理 費 収 入	600,000	600,000	0	関係団体管理費収入
10	過 年 度 収 入	200,000	200,000	0	
11	繰 越 金	21,831,000	22,875,000	△1,044,000	
	合 計	180,000,000	182,000,000	△2,000,000	

歳出の部

款	費 目	予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	神宮神徳宣揚費交付金	46,016,714	53,876,240	△7,859,526	支部を通じて各神社へ
2	幣 帛 幣 饌 料	9,000,000	9,000,000	0	別表及特別神社、本務・兼務神社、献幣使参向神社、幣饌供進神社、献幣使・随員旅費等
3	会 議 費	4,500,000	5,200,000	△700,000	会議旅費、諸費
4	庁 務 費	40,686,000	40,356,000	330,000	神事費、儀礼費、役員報酬、諸給与及び福利厚生費、需要費
5	負 担 金	27,973,424	26,592,432	1,380,992	神社本庁へ
6	事 業 費	14,200,000	17,100,000	△2,900,000	大麻関係費、教化部費、庁報発行費、職員研修費、東海五県連合会費等
7	研 修 諸 費	300,000	200,000	100,000	神社庁研修諸費
8	庁 舎 維 持 費	800,000	660,000	140,000	修繕費、設備費、火災保険費
9	交 付 金	2,500,000	3,400,000	△900,000	神職会、総代会各交付金
10	積 立 金	2,300,000	3,500,000	△1,200,000	役職員退職積立金、東海五県連合総会積立金
11	補 助 金	50,000	50,000	0	時局対策費
12	新 庁 舎 建 設 費	20,000,000	0	20,000,000	新庁舎建設事業会計へ
13	予 備 費	11,673,862	22,065,328	△10,391,466	
	合 計	180,000,000	182,000,000	△2,000,000	

令和6年度長野県神社庁災害救助慰藉特別会計歳入歳出予算書

歳入の部



(単位：円)



	科 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	負 担 金	3,240,000	3,285,000	△45,000	支部負担金、神職掛金
2	災害救助慰藉特別会計交付金	100,000	100,000	0	神社庁、総代会
3	本 庁 見 舞 金	150,000	150,000	0	
4	雑 収 入	1,000	1,000	0	雑収入
5	繰 越 金	6,509,000	6,464,000	45,000	
	合 計	10,000,000	10,000,000	0	

歳出の部

(単位：円)

	費 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減△	附記説明
1	災 害 慰 藉 費	3,685,000	3,685,000	0	神社災害慰藉費、神社総代慰藉費、神職災害慰藉費
2	神 職 掛 金	2,040,000	2,085,000	△45,000	神職掛金積立金
3	本 庁 災 害 慰 藉 費	300,000	300,000	0	災害対策資金
4	運 営 費	60,000	60,000	0	事務費、旅費、雑費
5	予 備 費	3,915,000	3,870,000	45,000	
	合 計	10,000,000	10,000,000	0	

<div><div>舞 見 中 署</div></div>				
<div>諏訪大社</div>	<div>上田市下之郷中池西七〇一 生島足島神社 宮司代務者 池内宣裕 氏子総代長 藤勇 職員総代一同</div>	<div>戸隠神社 宮司水野邦樹 他職員一同</div>	<div>穂高神社 名譽宮司 小平弘起 宮司 保尊 職員一同</div>	<div>長野縣護國神社 松本市美須々六番一号 他職員一同</div>
<div>松本市 四柱神社 宮司宮坂信廣 他職員一同 http://www.go-tvm.ne.jp/~yohashira</div>	<div>深志神社 名譽宮司 遠藤久芳 宮司 牟禮一 他職員一同</div>	<div>諏訪市茶臼山鎮座 手長神社 宮司前島正</div>	<div>武水別神社 宮司堀内潔 他職員一同</div>	<div>若一王子神社 宮司竹内直彦 大町市大字大町二〇九七</div>
<div>木曾總社 御嶽神社 宮司武居哲也</div>	<div>木曾御嶽王滝 御嶽神社 宮司滝和人</div>	<div>飯田市浜井町 破魔射場鎮座 富士山稻荷神社 宮司市原貴美雄 職員総代一同</div>	<div>佐久總社 新海三社神社 宮司井出清一 總代長 佐久市田口鎮座</div>	<div>上田市常田鎮座 總社大宮 科野大宮社 宮司今井貴美 總代會長 宮下憲治</div>
<div>上田市中心北鎮座 眞田三代崇敬社 大星神社 宮司関口守和 祢宜工藤建高 總代長 山崎治</div>	<div>飯山市小菅の里鎮座 小菅神社 宮司鷺尾隆男 總代會長 丸山吉</div>	<div>上伊那郡辰野町 三輪神社 宮司矢島正稔</div>	<div>上伊那郡飯島町 梅戸神社 宮司今井理泰 祢宜茅井佑</div>	<div>上伊那郡辰野町小野 矢彦神社 宮司立澤寿江 祢宜立澤俊輔 總代會長 小野猛夫</div>

 <h1>舞 見 中 暑</h1> 				
宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 宮司 宮司 宮司 小川 神 社 上水内郡小川村小根山鎮座	宮司 山田 充 春 大宮 熱田 神社 松本市梓川鎮座	宮司 飯田 泰一 祢宜 小穴 善一 宮司 氏子總代 住吉 神社 あつみ野	宮司 宮司 宮司 祢宜 宮司 宮司 水無 神社 木曽郡木曽町福島鎮座	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 大御 食神 社 権祢宜 権祢宜 権祢宜 新井 岡鳥 俊明 總代会長 新井 亮彦 男
宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 象山 神 社 長野市松代町鎮座	宮司 齋藤 吉睦 武井 神社 長野市東町鎮座	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 湯福 神社 長野市箱清水鎮座	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 八幡 宮 木曽郡木曽町開田高原西野	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 守田 神社 式内社 主任總代 櫻井 龍一 會計 北島 伸哉
宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 有明山 神社 安曇野市穂高有明宮城 彫刻で名高き裕明門	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 西山 神社 長野市岩石町鎮座 えびすの神	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 仁科 神明 宮 大町市社宮本	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 鳩ヶ嶺 八幡 宮 (重要文化財菅田別尊神像)	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 小井川 賀茂 神社 岡谷市小井川鎮座
宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 美和 神 社 長野市三輪鎮座	宮司 伊藤 光宣 白山 神社 伊那市御園区鎮座	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 神明 宮 松本市村井町	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 小野 神 社 塩尻市北小野鎮座	宮司 宮司 宮司 祢宜 祢宜 祢宜 三嶽 神 社 塩尻市中西條鎮座

暑 中 見 舞									
駒ヶ根市赤穂鎮座 大宮五十鈴神社 宮司 白鳥俊明 祢宜 白鳥操子 http://isuzujinja.com		長野市大町鎮座 長沼神社 宮司 長沼忠行 祢宜 長沼房一 権祢宜 沼誠		上伊那郡南箕輪村 殿村八幡宮 宮司 唐沢克忠 祢宜 唐沢光忠 総代会長 唐澤実		長野市松代町皆神山 熊野出速雄神社 (皆神神社) 宮司 武藤弘樹		奥州一之宮鹽竈神社御分社 鹽竈神社 宮司 大澤明三 祢宜 大澤節子 総代会長 蜂谷泉	
安曇野市豊科南穂高 洲波神社 宮司 宮澤佳廣		飯山市五束鎮座 (国重文若宮八幡社) 健御名方富命彦神別神社 宮司 高橋 穰 祢宜 高橋 隆一 総代会長 松本隆一		佐久市白田鎮座 稲荷神社 宮司 伴野健一 総代会長 楠本英昭		木曽郡南木曾町田立鎮座 県無形民俗文化財花馬祭り 五宮神社 宮司代務者 高橋 守		東筑摩郡筑北村坂北鎮座 無形文化財お田植祭り 刈谷澤神明宮 宮司 山崎洋文 総代会長 堀田 勇	
佐久市鎮座 平賀神社 宮司 小間澤 貴肇 祢宜 小間澤 登 総代会長 高橋		編集後記 令和六年四月四日二十四節気の第五である清明の日に新庁舎竣工奉告祭が神社本庁統理をお迎えして県内外の関係各位百人余の参列の下斎行されました。長野県神社庁史に残る大きなできごとでした。 本年当県は、五年に一度回ってくる東海五県の当番県で、五月十日岡谷市文化会館のカノラホールで東海五県の連合総会が行われました。この時も本庁統理様が親しくご臨場されました。神社本庁統理鷹司尚武様は摂家鷹司家の第二十八代当主であられ、前の神宮大宮司であります。養母の鷹司和子様は昭和天皇の第三皇女で上皇陛下の姉上でありますから、天皇陛下の義理の従兄になります。 このような尊い方から親しく							

す。養母の鷹司和子様は昭和天皇の第三皇女で上皇陛下下の姉上でありますから、天皇陛下下の義理の従兄になります。
このような尊い方から親しく



中堅神職研修会

お言葉をいただけたことはこの上ない喜びでありました。

東海五県の当番ということで、六月の中堅神職研修会は新しく竣工した長野県神社庁でおこなわれました。
新しい庁舎を中心に、斯界がますます発展することを祈ります。
令和六年夏至

伊勢の神宮

第六十三回「式年遷宮」

明年、木曾で「御杣始祭」 みそまはじめさい

天皇陛下には四月八日に「御聴許」あらせられ、伊勢の神宮「第六十三回式年遷宮」の準備が始まりました。

(鷹司統理謹話二頁参照)

「御聴許」とは、天皇陛下がお聞き届けになるということです。

「式年」とは定められた年を、「遷宮」とは宮を遷すことを意味します。

二十年に一度、東と西に並ぶ宮処を改めて、古例のままに内宮外宮の正宮を始め宇治橋なども造り替え、ご社殿や御装束神宝など全てを新しくして、大御神にお遷りいただくお祭りです。

この式年遷宮は約千三百年前、天武天皇の大御心により始まり、持統天皇四年(西洋歴六九〇年)に第一回が行われ、室町時代後期に一時中断しましたが、織田信長や豊臣秀吉による援助で再開。以降連綿と歴史

を紡ぎ続けております。

今回は令和十五年秋、最も重要な儀式でご神体を新しい正殿へ移す「遷儀の儀」を行うことを目指すとの発表がありました。

慣例によると、遷御の儀の八年前に建築用材の伐採儀式が始まるので、明年(令和七年)六月三日には、木曾郡上松町にて御杣始祭が斎行されます。

式年遷宮は、「皇家第一の重事、神宮無双の大宮」とも称される日本で最大最高のお祭りです。国民の皆様深いご理解と絶大なるご奉賛を賜るようお願い申し上げます。



第62回式年遷宮御杣始祭／上松町